

学校評価報告書（自己評価書・学校関係者評価書）

令和5年2月13日作成

中期目標	重点努力目標（評価項目）		自己評価	総合評価	達成状況と成果	関係者評価	学校関係者の意見・要望	今後の改善方針 次年度への課題 （★学校関係者評価を受けて）
【豊かな心を育む】温かい人間関係づくり、自己肯定感を高め、感動を味わえる体験を推進する。	基本的な生活習慣の定着	・幸生活三則（時間を守る・気持ちのよい挨拶・黙って掃除）をはじめとする「こころ整う身のこなし」を家庭とともに推進する。	C	B	・「時間・あい・そう」の合言葉が徹底していないことを理由に、教員による自己評価が低い。長引くコロナ禍による声を出す機会の減少、改修工事による動線の複雑化、気ままで衝動的な言動をしがちな低学年児童の増加など複数の要因はあるが、全体的に基本的な生活習慣の定着という点で課題がある。 ・がんばりやよいところを伝え合う場面を設定することが、子どもたちの自己肯定感の高まりにつながっている。	B	・元気に挨拶できる子がたくさんいた。 ・挨拶運動などに、もう少し力を入れてもらおうとよい。 ・企画に創意工夫をして、自発的な取り組みを促すことがポイントか。 ・ペア学年の活動の再開は関係づくりに大変よい。 ・教室に担任の先生からの心のこもった言葉があふれているクラスがあり、とても素敵だと思った。	・朝の会で必ず合言葉を唱える、黙想タイムを復活させるなど、意識づけと行動につながる手だてを共通化する。担任以外の児童に対しても声を掛けたり、学級全員で守ろうとしている姿を取り上げて価値づけたりする。 ★朝のあいさつ花道や、教職員・来客への「こんにちは」など、自発的に行動できる児童もいる。学級会や委員会活動を絡め、緩みやマンネリを感じたときには、児童自身にも個や集団を見つめ直させる機会を創りたい。
	自他のよさを認め合う集団づくり	・児童の発意・発想による実践的な活動を展開し、自己有用感と感動を味わえる方策（特に異年齢集団との交流）を取り入れる。	B					
【確かな学力を育む】基礎・基本の定着、内発的動機をもとに学び続ける態度の育成の両立を図る。	基礎・基本の定着	・日々の授業では、教師と児童が「本時の目標」の達成を板書で十分に意識し、実態に応じた的確な支援を施すことで、確実な習得を図る。	B	B	・教師、児童ともに目ざす姿や目標を明確にもち、授業に取り組むことができた。 ・目標を達成できなかった子への支援が十分でなく、学力の二極化が、どの学年でも見られる。学校不適応や、授業意欲の減退につながりかねないと危惧する声がある。 ・iPadを活用した一人調べやその発表はできたが、問題解決的な授業に「生かす」までは至らないことが多かった。	B	・目的・目標の認識は重要であると思う。 ・個への支援は難しい面もあるが、何がどのようにできるのかを見極めた上で粘り強く取り組んでほしい。 ・一人一台のiPadが自然に溶け込んだ授業が多く見られるようになった。その利用については、今後のさらなる充実を期待する。	・日々の授業で目標達成に至っていない児童への支援を丁寧に行い、自信をもたせる必要がある。少数指導などの人的配置はすぐには叶わないので、実態に応じて朝のモジュールの時間をドリル学習に充てたり、個別最適化学習のできるiPadのアプリを積極的に利用したりして、日常的に基礎・基本の定着を図る。 ★一人一人をよく知る担任を中心に、授業での支援の工夫や、補充学習などの充実を図る。
	主体的・対話的で深い学びの実現	・知的好奇心や向上心などをもとに、一人調べや練り合いによって追究を深め、生活や社会に生かす問題解決的な学習を実践する。	B					
【たくましさや育む】困難に立ち向かい乗り越える経験を通して、体力・気力の充実を図る。	年間を通した体力づくり	・教育課程の工夫（モジュール・余剰時間等）、体育的行事や授業の重点的な取り組みと外遊びの励行により、体力の向上を図る。	A	B	・校舎内の一角に「体力アップゾーン」を設けたり、暑い時期にも体育館開放をしたりしたことにより、体力向上への意欲づけを図ることができた。 ・「ぐんぐんカード」を定期的実施することで、生活習慣を見直すことにつながり家庭の協力も得られている。 ・学校／学級不適応児童に対する共通理解が進み、その増加に歯止めをかけている。長期的な展望のもとでの継続支援が必要。	A	・寒い中でも半袖・半ズボンで元気に過ごす子が何人かいて、すばらしい。寒さに負けない体力づくりができています。 ・器具が自由に使えるのはすばらしいが、安全面は要チェック。種類を増やすのもよいかと思う。 ・長縄跳び大会に向けてクラス一丸となっている言葉や姿が見られ、意識が高まっていると思った。	・外遊びの奨励は、担任の呼びかけや一緒に遊ぶ姿勢に左右される。積極的にやりたい。 ・学校スポーツトレーナーを現研の講師として招き、学校でできる取り組みを提案してもらう。 ・グリーンルームの持ち方について十分検討すべきである。登校へのハードルは下がったが、何を身につけるのか明確にする。 ★楽しみながら児童自らが運動に親しめる環境づくりを安全に配慮してすすめていく。
	心身の健康の保持・増進	・「ぐんぐんカード」を活用し、家庭を主体に望ましい生活習慣の定着と健康管理を図る。 ・不登校・学級不適応児童対策を機能させる。	B					
【開かれた教育課程】目ざす方向性や資質・能力を地域社会と共有し、連携してその実現を図る。	社会に開かれた教育課程	・学校の教育方針や実践成果について、各種おたよりやホームページを活用して積極的に発信し、教育活動の透明性を高める。	A	A	・ホームページの更新については、学年通信等のおたよりや、行事や校外学習のみの掲載が多くなってしまった。授業など、日常の生活の様子についても増やしていきたい。 ・社会科で消防署やスーパーマーケット見学が再開でき、地域教材として生かすこともできた。 ・「のびるndeスクール」には、100名以上の子どもが登録しており、参加している子どもからは、楽しいという声が聞かれる。	A	・ホームページの更新をいつも楽しみにしている。 ・行事や授業の様子を公開することは大変よいことだと思う。続けてほしい。 ・校舎内のところどころに、英語の表記のはり紙があり、目で触れることができてよい。	・ホームページについては、担任が週の予定を掲載して発行する学級通信と内容が一部重なる。働き方改革の観点からも、一本化を検討する必要がある。 ・学習に生かすことのできる人材、地域教材があれば、引き継ぎ、活用できるようにしておく。 ★この3年間のコロナ禍で、学校行事や授業などでも、地域との交流が途絶えがちであった。世情を鑑みて徐々に再開し、つながりを取り戻したい。
	地域との連携	・地域の「人・もの・こと」との繋がりを意識させるとともに、「のびるndeスクール」「コミュニティスクール」の在り方を共有する。	B					
【信頼される教職員】安全・安心な学校づくり、教職員の資質および労働環境の向上を図る。	安心安全な学習環境づくり	・研修やOJTにより、教職員個々の危機管理意識を高める。記録の累積による児童理解とじめの起こらない集団づくりを進める。	A	A	・養護教諭を中心とした保健関係のシミュレーションは、教員一人一人の危機管理意識を高めるのにとってもよかった。 ・学年主任を中心として、困ったことは一人で抱え込まずに学年全員で考えることにより、組織的な対応ができています。 ・半月に一度、自分自身の勤務時間が提示されることや、勤務終了時刻に各学年で終礼の挨拶をすることで、仕事の優先順位を考えたり、タイムマネジメントを意識したりできるようになった。 ・時間外在校等時間を45時間未満に抑えられている教職員は、市平均よりもまだまだ少ない。逆に、過労死ラインと言われる80時間超えも常に一定数いる。	A	・校舎が新・旧・プレハブと様々で、それぞれ集中できない部分もある中でも元気に授業を受け、しっかり対応できていた。 ・工作などの実習中、多くの児童を指導するのに目が行き届きにくく大変そうだと感じた。危険な道具を使う授業は、フォローの人員がいるとよい。 ・運動の際にマスクを外すことが徹底できていなかった。ここ3年間のマスク着用が当然とされている日常については、情報の取捨選択や伝え方という面から疑問を感じている。	・働き方改革については、業務自体の軽減があまり感じられないという声が根強い。気づきをもとにPDCAサイクルによる改善に向けた努力を続けていく。 ・定時に終礼の挨拶をする習慣は、働き方改革の根本的な意識づけにもつながるので、次年度もすべての学年で継続する。 ・児童の情報についての引き継ぎが十分でなく、対応に苦慮したり差異が出たりすることがあった。年度間の確かな引き継ぎで、児童のとまどいを減らし、保護者の信頼を得ることが大切。 ★令和5年度12月には、大規模改修が終わり、落ち着いた環境が戻る。その間、児童の大きな事故などを起こさぬよう、安全・安心な学校づくりに努める。
	組織体制の強化	・学年主任を中心とした組織的な対応と報告・連絡・相談・確認の徹底を図り、見通しが明確かつ風通しのよい職場づくりを進める。	A					
	教職員の働き方改革	・客観的な勤務実態の把握と個々のマネジメントによって、働き方に対する一人一人の意識改革を進め、上限方針の遵守を目ざす。	B					

